修士論文（要旨）
2017 年 1 月

# 後期高齢者の就業継続プロセスの検討
## －都市部在住者を対象として－

指導　　長田　久雄　教授

老年学研究科
老年学専攻
215J6009
柳　京子

Master's Thesis(Abstract)
January 2017

# The Process to Continue Working Among the Old-Old : Living in Metropolitan Areas

Kyoko Yanagi
215J6009
Master's Program in Gerontology
Graduate School of Gerontology
J.F.Oberlin University
Thesis Supervisor: Hisao Osada

目次

第１章　はじめに
　Ⅰ．我が国の高齢化の現状　・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　Ⅱ．超高齢化社会と後期高齢者の就業　・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２章　研究目的と意義　・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第３章　用語の定義　・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第４章　研究方法
　Ⅰ．調査対象者　・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　Ⅱ．調査方法
　　ⅰ）面接方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　　ⅱ）データ収集　・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　Ⅲ．分析方法
　　ⅰ）分析方法の選択　・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　　ⅱ）分析テーマと分析焦点者　・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　　ⅲ）分析手順　・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　Ⅳ．倫理的配慮　・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第５章　結果と考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　Ⅰ．結果
　　ⅰ）概念・サブカテゴリー・カテゴリーの構成　・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　　ⅱ）分析結果全体の要約とその構成としてのストーリーライン　・・・・・・・・・9
　　ⅲ）ストーリーラインの要約　・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　Ⅱ．各カテゴリーにおける結果と考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　　ⅰ）結果と考察①　《働く理由》　・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　　ⅱ）結果と考察②　《就業継続可能》　・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　　ⅲ）結果と考察③　《だから辞められない》　・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　　ⅳ）結果と考察④　《仕方がないから続ける》　・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　　ⅴ）結果と考察⑤　《でも働く気力はある》　・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
　　ⅵ）結果と考察⑥　《これからも自分を活かしていきたい》・・・・・・・・・・15
　Ⅲ．本研究の限界と今後の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第６章　結語　・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

謝辞
文献

[資料]
表Ⅰ　分析対象者の基本属性
表Ⅱ　概念・カテゴリー・サブカテゴリーのまとめ
図　　結果図
分析ワークシート

## 第 1 章　はじめに

### １．我が国の高齢化の現状

現代の超高齢化の現象は，高齢人口の増加，生産人口の減少，社会保障費の増大，老後の貧困，健康寿命の延伸といった社会変化をもたらした．これらは今後の日本の在り方を左右する大きな問題であり，早急の対応が求められる．本研究はこうした背景のもと，それらの課題に対応する一つの可能性として後期高齢者の就業に着目したものである．

### Ⅱ．超高齢化社会と後期高齢者の就業

生涯現役が望まれる一方で，後期高齢者の就業は難しいのが現状である．今後は，働く場所の確保や環境整備といった取り組みが，社会全体の課題として一層強く求められる．

## 第 2 章　研究目的と意義

これまで，後期高齢者の就業に焦点をあてた先行研究はほぼ見られない．本研究の目的は後期高齢者の就業継続プロセスを明らかにすること．そのことは今後の高齢者就業の在り方を検討する際の一助となると考える．

## 第3章　用語の定義

就業：「収入を得る職業，業務に就いていること」

職業：「日常従事する業務」

業務：「職業や事業などに関して経常的に継続して行う仕事」とした

## 第 4 章　研究方法

### Ⅰ．調査対象者

調査対象者は，都市部在住で①75 歳以上であること，②就業中であることを条件とした．その結果，男性 2 名，女性 6 名で，年齢は 77 歳から 86 歳，平均は 80,5 歳であった．就業継続年数は最長で約 45 年，最短で 5 年以上を経過していた．対象者の選定は機縁法を用いた．

### Ⅱ．調査方法

調査はインタビューガイドをもとに半構造的面接調査を行なった．

データ収集は，個人情報の厳守を前提に，会話を IC レコーダーに録音して逐語化することや，それをもとに研究を進めることを説明し，対象者の同意を得てから行った．データは，1016 年 8 月から 11 月初旬にかけて収集した．

### Ⅲ．分析方法

分析は，木下[24) 25)]の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を採用した．この分析方法を用いた理由は，M-GTA が①分析焦点者を中心とした人間の行動や相互作用の変化，動きを説明するものであること②研究対象とする現象がプロセス的性格を持っていることに適した分析法であるからである．分析テーマは「後期高齢者の就業継続プロセス」，分析焦点者は「就業中の都市部在住後期高齢者」とした．

Ⅳ．倫理的配慮

倫理的配慮については，桜美林大学研究倫理委員会の承認を得ている．

承認番号 16008（2016 年 6 月 23 日付）

## 第 5 章　結果と考察

### Ⅰ．結果

分析の結果， 27 個の概念，10 個のサブカテゴリー，6 個のカテゴリーが生成された．

### Ⅱ．各カテゴリーにおける結果と考察

生成されたカテゴリーである≪働く理由≫，≪就業継続可能≫，≪だから辞められない≫，≪仕方がないから続ける≫，≪でも働く意欲はある≫，≪これからも自分を活かしていきたい≫をストーリーラインに沿って結果と考察を行なった．

### Ⅲ．本研究の限界と今後の課題

本研究の限界は対象者の偏りである．対象者の職業や目的を限定した場合では，結果に違いが出る可能性がある．また，対象者を都市部在住の高齢者としたため，全国的な一般化は難しいと言わざるをえない．今後は，目的や職業を絞った対象者の抽出が必要である．

## 第 6 章　結語

本研究では現在就業している後期高齢者に焦点を当て，彼らの就業継続プロセスを M-GTA を用いて分析した．ストーリーラインや結果図からは彼らの就業継続プロセスの一様が見えてきた．それは①彼らが何を求めて働いているのか②どのような形で就業継続が可能になっているのか③働き続けることで何を得ているのか④これからどうしたいと思っているのか，という概要である．彼らは，健康を維持する中， 逼迫した経済不安がなく，生活が安定し，加齢による就業能力の衰えはあるものの、働き方の工夫や無理のない勤務体制により就業を可能にしていた．また人との係わりから，社会の一員である自分や人から必要とされる自分を認識し，働くことに喜びを感じていた．さらに他者から信頼を得，自立していると感じることで，彼らなりの自己肯定感を形成し，それらのことは「これからも自分を活かしていきたい」という前向きな思いに繋がっていた．本研究は，高齢者の就業を，「だから就業すべき」だとか「就業することが高齢者のためになる」という論評を導くためのものではないが，今後、働きたいと希望する人が、その時いかにしてそれを可能にするか、そうした課題と向き合うためにも、これらのことを考慮に入れた研究の必要性は高いといえるだろう。

謝辞

お忙しい中，本研究の調査にご協力いただきました皆様には厚くお礼申し上げます．また，本論文執筆にあたり，数多くのご指導を賜りました桜美林大学大学院老年学研究科の諸先生方に心より感謝申し上げます．

文献

1） 内閣府：「平成 27 年版高齢者会白書（全体版）」
(http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/zenbun/27pdf_index.html　2015.12.14)
2）内閣府：「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」結果
(www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/sougou/gaiyo/index.htm 2016.6.1)(2014)
3）大阪府立公衆衛生研究所：「平成 11 年度「高齢者の就労」に関するまとめと提言」
(www.jph.prefi.osaka.jp/report/aged/teigen11.pdf 2016.6.1)(2000)
4）松本恵：高齢者の就労意欲に関わる要因；生活意識と関係性についての考察.
Works Review，(https://www.works-i.com/pdf/r_000019.pdf 2016.5.15)(2006).
5）福島さやか：高齢者の就労に対する意欲分析．日本労働研究雑誌，1：19－31(2007).
6）福島さやか：高齢者の就労ニーズ分析；高齢期における就労形態の探索.
Works review，1：8－21(2006).
7）徳山ちえみ：後期高齢者が朝市活動を行う意義；朝市活動の意義と健康指標の年代別比較から．川崎医療福祉学会誌，23(1)：49－58(2013).
8）厚生労働省：「平成 26 年簡易生命表の概況」
(www.mhlw.go.jp/toukei/seil 2016.12.14)(2014)
9）日本経済新聞：2015.8.28.
(nikkei.com/article/DGXLASDG28H2A_Y5A820C1000000 2016.6.21)(2015)
10）前掲書 8）
11）ケイト・リンチ(平野誠訳)：高齢者が働くということ．20，17，ダイヤモンド社，東京(2014).
12）厚生労働省：「平成 25 年度　生涯現役社会の実現に向けた就業のあり方に関する検討会」報告書
(mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000034ttj-att/2r98520000034ty2.pdf 2016 .6.1)(2013)
13）杉澤秀博，柴田博：生涯現役の危機；平成不況下における中高年の心理．107－108
ワールドプランニング，東京(2003).
14）内閣府：「平成 25 年度　高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」結果
(www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/sougou/zentai 2016.6.1)(2013)
15）東京都福祉保健局：「平成 22 年度　高齢者の生活実態；東京都福祉保健基礎調査」
(www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/kiban/chosa_tokei/zenbun/heisei22/22hokokusyozenben.files/9syou.pd 2016.6.15)(2010)
16）大内尉義，秋山弘子：新老年学　第 3 版，1702，東京大学出版会，東京(2010).
17）東京都福祉保健局：「平成 22 年度　高齢者の生活実態；東京都福祉保健基礎調査」
(www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/kiban/chosa_tokei/zenbun/heisei22/22hokokusyozenben.files/9syou.pd 2016.6.15)(2010)
18）長田久雄：「エイジレス就業の時代を拓く；支えられる存在から支えあう存在へ」
NIRA オピニオンペパー．(18)，(2015).
19）内閣府：平成 27 年版高齢社会白書．日経印刷，東京(2015).
20）葉っぱの町上勝村いろどり　いろどりストーリー
(irodori.co,jp/asp/nwsitem.asp?nw_id=2 2016.6.15)(2015)
21）柴田武，山田進：類語大辞典，講談社，(2002)
22）新村出：広辞苑：岩波新書，(1955)
23）日本国語大事典第二版編集委員会　小学館国語辞典編集部，第 7 巻，小学館，(2001)
24）木下康仁：ライブ講義 M‐GTA；実践的質的研究法；修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて．弘文堂，東京(2007).
25）木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践；質的研究への誘い．弘文堂，東京(2006).
26）秋山ちえみ：介護予防につながる高齢者の朝市活動に関する研究；活動意義と健康に関する年齢差．川崎医療福祉学会誌，20(2)：347－356(2011).
27）南　潮，藤原佳典：高齢者就労に関する先行研究．その 1，(2016.7.28).
28）藤原佳典，南潮編：就労支援で高齢者の社会的孤立を防ぐ．202，ミネルヴァ書房，東京(2016).
29）横山知二：学者は語れない　儲かる里山資本テクニック．14－15，43－44，45，46，158，160－161，SB クリエイティブ株式会社，東京(2015).
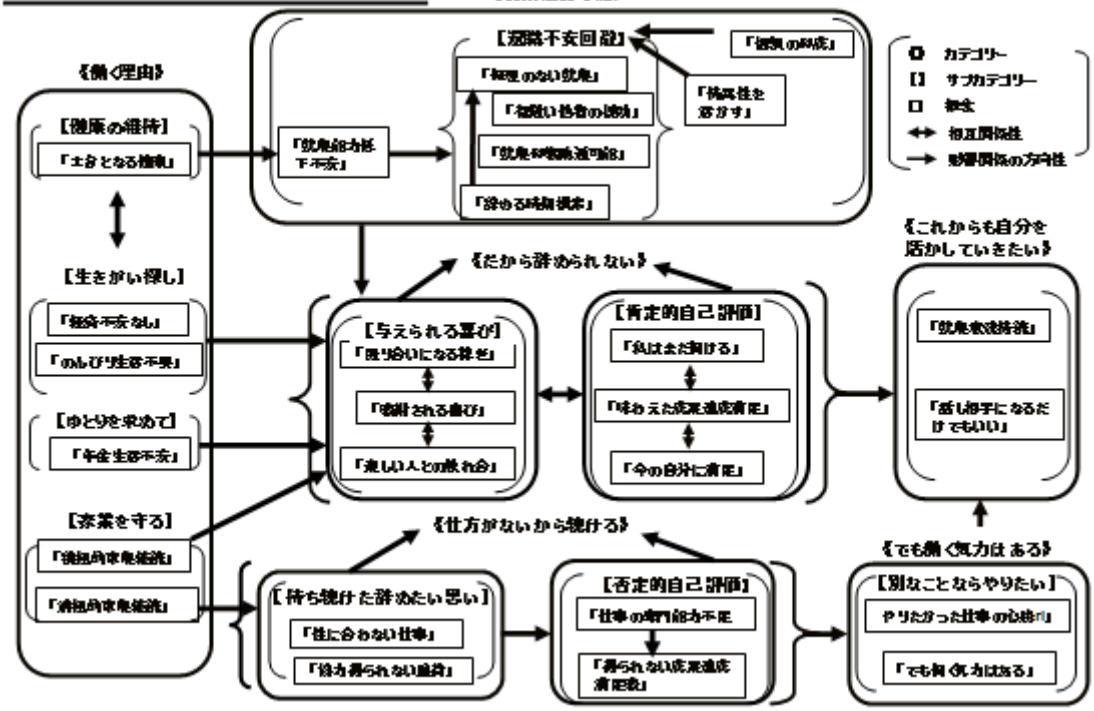
図　結果図：後期高齢者の就業継続プロセス